2-P-1-1
Transistent osteoporosisの2例

座長 中田 研

厚生省総合病院 胃腸外科
○亀井 豪務（かめい こうむ）、数田 義雄、盛谷 和生、宮内 晃、藤原 淳

【はじめに】Transistent osteoporosis（過骨粗鬆症）は、特に認知なく発症し、痛みとX線像での骨萎縮を生じることが、数週～数ヶ月で治癒する原因不明の疾患である。今回我々は2症例を経験したので報告する。【症例1】58歳女性。誤導なく右膝痛出現し、近医にてヒアルロン酸関節液注入を行ったが、軽快せず4ヶ月目に初診。遅近位化にX線像上明らか異常を認めず、MRI プロトン密度像にて低信号域を認めた。Transistent osteoporosisと診断し、足脛下治療、荷重制限を行い、3ヶ月後には症状改善、MRIにて低信号域は消失していた。【症例2】8歳男性。誤導なく左膝痛出现し、近医にてヒアルロン酸関節液注入を受けるも軽快せず7ヶ月目に初診。大腿骨外側面にX線像上萎縮、MRI プロトン密度像にて低信号域、T2脂肪抑制像にて高信号域を認めた。荷重制限を行い、痛み軽快傾向にある。【考察】Transistent osteoporosisは主に膝関節に発症することが多く、続いて膝、足関節の順に好発する。治療法としては、安静、荷重歩行などの保存療法が主体である。近年、MRIの普及により診断が容易となったため、その報告例が増加している。しかしながら、その予後は特記すべき変化は少ない。本疾患の診断上の問題点について考察して報告する。

2-P-1-2
80歳以上の高齢者に発生した人工膝関節置換術後大腿骨頸部骨折の治療経験

１和歌山県立医科大学 整形外科学教室 ２新宮市立医療センター
○山口 聡史（やまぐち こうじ）、大宝 英矢、葉屋 龍三、中谷 如希、舟津 輝博、吉田 宗人

【目的】80歳以上の人工膝関節置換術（TKA）後大腿骨頸部骨折に対して骨接合術を行った3例を経験したので報告する。【症例1】80歳、女性。歩行中に転倒し、負傷直前は可動域（ROM）は60°、骨折型はAO 分類33-A1であった。小切開からStryker 社製T2 IMSCail nait 置換を試みたが、ガイドウイザードが膜側骨片後側に干渉し挿入不能であり、V-Y quadricepplastyにて展開した。手術時間は50分、出血量は100mlであった。術後1年のROMは5°60、杖歩行を行っている。【症例2】85歳、女性。約60セントの段差から転倒し、骨折型はAO 分類33-A1であった。Stryker 社製T2 IMSCail nait を用いて骨接合術を行った。手術時間は100分、出血量は100mlであった。最終検査時のROMは術前とはほぼ同等の90°であった。【症例3】81歳、男性。主訴で右TKAを施行後8日目に、ROM等捻挫中に骨折、AO 分類33-A1の大転子部骨折を認めた。小切開にて髕関節よりIMSCail nait を挿入し、大腿骨コラボネートが約30°過伸展位となるため、nait を抜去し、MIPO法によるプレート固定を計画、変更した。手術時間は141分、出血量は36mlであった。【考察】TKA後大腿骨頸部骨折は骨栄養障害に加えて創傷が集まるため強固な内固定を要する。IMSCail nait による内固定を勧める報告が多いが、大腿骨コラボネートの形態によってはnaitが挿入できずプレート固定を選択せざるを得ない場合もある。MIPO法によるプレート固定は低侵襲で骨盤方に有利であるが、手技に熟練を要するため注意が必要である。

2-P-1-3
膝関節内に発生した滑膜性血管腫の2例

○藤田保健衛生大学 整形外科 2愛知県がんセンター 愛知学院
○山本 康洋（やまもと やすひろ）、鷲見 大輔、村村 大輔、山田 治基、米川 正洋

【目的および方法】滑膜性血管腫は稀な良性血管性腫瘍で血管腫の10％以下とされる。膝関節内に発生した滑膜性血管腫の2例を経験したので報告する。【症例1】症例1、11歳男児。家族歴、既往歴は特記すべき点なし。6歳時に運動後より左膝痛出現し近医受診を受ける経過観察となった。その後2度、関節内出血を来たすが、疼痛は休息的でない。11歳時に関節内出血を来たしたため当院紹介となった。MR11 T1強調画像にて筋肉と等輝度、T2強調画像にて高輝度を呈した一部採択されている腫瘍を左膝関節内に認めた。理学所見上、同部位に圧痛を認めた。腫瘍切除術を施行し、病理検査にて滑膜性血管腫と診断された。症例2、14歳女性、家族歴既往歴は特記すべきものなし。12歳時より右膝痛出現し、近医にて経過観察を指示された。次第に疼痛が強くなり他院を受診、著明な筋萎縮と可動域制限を認めた。MRIにて膝蓋上部にT1強調画像にて等輝度、T2強調画像にて高輝度を呈する腫瘤性病変を認め、一部前側方筋内に進展を認めた。腫瘍切除術を施行し、病理検査にて滑膜性血管腫と診断された。【考察】滑膜性血管腫は稀な腫瘍で若年者に多いとされる。症例1は関節内に発症する間節内出血を呈するが、無症状のことも多く、診断困難な場合もある。鑑別疾患は色素性結膜炎、牛乳様滑膜腫、滑膜性骨髄腫、間質性骨髄炎などがあるが若年者の膝痛には本疾患も念頭に置く必要があると考える。